

令和7年度 第2回高岡市在宅医療・介護等連携推進協議会 議事録

日 時 令和8年2月18日（水） 19時00分～20時15分
場 所 高岡市役所 802 会議室
出席者 委員：19名
アドバイザー：1名

1. 開会

2. 福祉保健部長挨拶

3. 報告・協議事項

- (1) 高岡市在宅医療・介護等連携推進協議会・部会・ワーキングの令和7年度の実施状況及び令和8年度実施計画（案）について【資料No. 1-1～1-5】

資料に基づき説明。

- (2) 在宅医療を担う医師確保等の検討ワーキングの令和7年度の実施状況及び令和8年度実施計画（案）について【資料No. 1-6】

資料に基づき、林委員より説明。

- (3) 高岡市在宅医療・介護等連携推進協議会の活動体系図（案）について【資料No. 2】

資料に基づき説明。

4. 意見交換

- (1)高岡市在宅医療・介護等連携推進協議会・部会・ワーキングの令和7年度の実施状況

〔会長〕

高岡市在宅医療・介護等連携推進協議会は4つのワーキング、医師会で開催されていたものを踏襲したものになっている。在宅支援ワーキングでは、多職種の知識、技術の向上を図ることを目的に、研修会を企画している。第3回の研修会では誤嚥性肺炎の予防の視点で講義をしてもらった。情報共有ワーキングでは、ICTツールでの連携について検討しており、高岡多職種ネット（バイタルリンク）については、今後さらに浸透させていかなければならないと感じている。さらにいろいろなところで活用できるとよい。多職種で使用できる情報共有ツールを作成しており、業務負担の軽減を図りつつ、うまく連携ができないかと考えている。普及啓発ワーキングでは、市ホームページ上に在宅医療・介護・障がい福祉サービスに関するポータルサイトを作成し、市民が情報を得られやすいようにした。課題はACPの普及啓発である。自分事としてとらえられるかが課題である。在宅医療を担う医師確保等の検討ワーキングについては、メンバーは減ったが、在宅医で協力し合える体制確保について協議している。

〔委員〕

- ・人生いきいきノートアプリについて、どれだけ普及しているかを教えてほしい。

〔事務局〕

・人生いきいきノートアプリについては、昨年12月1日よりTAKOAKAアプリ内に人生いきいきノートアプリを搭載した。現在52名が登録している。少しずつ普及啓発していきたいと考えている。ご協力をお願いしたい。

〔会長〕

・ACPの普及啓発は課題である。今後、普及啓発ワーキングで検討してほしい。

〔委員〕

・バイタルリンクの普及の話があったが、どういう形で利用されているか。

〔会長〕

・バイタルリンクは、主に、在宅の患者の支援において多職種で利用している。バイタルリンクを活用して、例えば、在宅で関わっているケースを訪問することがあれば、多職種から本人の状況について情報を得たり、情報提供を行ったりすることができる。実際に利用してみて、他の理学療法士の方にも伝えてもらえれば、バイタルリンクを利用する人も増えるので、ご協力をお願いしたい。

〔委員〕

・人生いきいきノートを書いている人が少ないと感じている。知人が人生いきいきノートを書いており、亡くなった後、ノートに記載された内容を娘さんが実践した例があった。50代の人も書いている。エンディングノートを利用したい人もいると思われるため、もっとノートのことを知らせることができれば、もう少し書く人も増えるのではないかと思う。最近、自分の母が書いていることを知った。まずは、自分の家族に普及していくのもいいのではないかと思う。

〔委員〕

・バイタルリンクについて、毎月、市から情報提供される参加施設及び利用者一覧を確認している中で、施設、利用者登録数が増えていると感じている。高岡市外、特に、富山県西部の利用者が増えていると感じているが、利用職員の削除の作業が追いついていない。変更の申請が出てこないのではないか。バイタルリンクにしばらくアクセスしないと、途中でアカウント、パスワードが抹消されていることがあるので、バイタルリンクを利用している人、登録を抹消されている人のばらつきがある。登録はしていてもなかなかアクセスする機会がない方向けに、あえて、アクセスするような部屋があって、みんなで入ってみようというような簡単な会などがないと、利用者数が増加しても実際に利用している実感がつかめない方も増えるのではないかと思うので、検討をお願いしたい。

〔事務局〕

・バイタルリンクについては、バイタルリンク上の掲示板以外で、利用者登録削除に係る申請手続きの周知方法について検討したい。使い方については、多職種が使ってみようと思えるような啓発をしていきたい。

〔委員〕

・デイサービス事業所で歯科衛生士として嚙下りハビリをしている。バイタルリンクは、アカウント登録はしているが、使う機会はない。活用場面として、看取りの内容が多いと感じている。

〔会長〕

・看取りのケースばかりではない。デイサービスで実践している内容などをバイタルリンク上に記載してほしい。

〔委員〕

・バイタルリンクの使い方がわからない例もある。バイタルリンクを活用している症例検討など、使い方を広げるような企画をするとよい。リハビリの様子や口腔ケアの動画をアップしたりする例もある。食事形態を伝えることもある。このような取り組みを紹介してもらえるとよい。

〔委員〕

・医師の高齢化が課題となっている。訪問看護職員やケアマネジャーの高齢化についても考えていかないといけない。薬剤師会として、ACPの普及については、お薬手帳などを活用し、協力できればと思うが、今は電子処方箋になっており、どのように普及啓発していくか検討が必要である。

〔会長〕

・薬剤師会でも、ACPの普及に、協力していただけるとありがたい。ACPの普及については、ワーキングで考えていかなければならない。

(3) 高岡市在宅医療・介護等連携推進協議会の活動体系図（案）について

〔会長〕

・活動体系図で、この協議会そのものや各ワーキング活動がどのように進んでいくかを指標として全体で見渡せるものとなっている。目標を最終目標、長期目標、中期目標の形で設定している。

・長期目標については、①体制整備、多職種・多機関連携、②住民啓発の2つに分け、中期目標については、日常の療養支援、入退院支援、急変時の対応、看取りの4場面と、災害支援、人材の確保、スキルアップについて設定している。人材の確保については、人材の高齢化の話も出ていたが、今後のことを考え、人材を確保してその人たちのスキルアップを目指していく必要がある。

・短期目標については、どれだけ改善されたかがわかるように、指標を中心に記載している。

〔委員〕

・活動体系図の中の、災害支援の部分が気になる。DMATなどの体制がある中で、この体系図は普段どのように使われるのか。避難所でどのように使うのか。

〔事務局〕

・災害支援については、個別避難計画の策定数を指標にしている。避難所に必要なことを聞かせてほしい。

〔委員〕

・避難所での長期の生活を考えた場合、バイタルの状況や服薬の状況などを継続的にみていかなければならない。

〔事務局〕

・実際、どのような薬を服薬しているのか等の医療の情報については、詳細版にはある。災害支援については、個別避難計画をもとにデータ化し、避難所とも連携し、各地区にどのような人がいるのか等把握したうえで、避難所の体制の改善を図っていきたいと考えている。例えば、障がい者の方が避難する場合、障がい者用のスペースを確保する等、避難所の体制を充実させていきたいと考えているので、まずは個別避難計画の策定を推進することで、避難所の体制も改善できるのではないかと考えている。

〔会長〕

・県医師会では、医療的ケア児の避難について、協力が得られる病院に部屋を借りて、避難できるようにならないかと考えているようである。岡山県では、「ぼうさいやどかり おかやま」の形で、医療的ケアの必要な方が、災害のおそれがある時や、自宅の停電が続く時に、避難先として地域の病院や福祉施設を利用するためのシステムを構築している。我々も取り組んでいかなければいけないのかもしれない。

〔委員〕

・人生いきいきノートについて、在宅医療において、家族がいるケースについては情報が得られやすいが、独居、身寄りなしのケースについては、意向がわかりづらい。そのようなケースについては、思いを聞くことが必要である。また、救急搬送され入院する際も、情報があれば非常に助かる。広く周知するのもいいが、特に必要な人に積極的に利用してもらおうということを考えていただければと思う。

〔委員〕

・勤務先の特別養護老人ホームが避難所の受け入れ施設になっているが、例えば、経口栄養剤を普段利用していない人への対応について、相談できる栄養士がなかなかいないので、栄養士会に相談し、情報を入手した際にすぐに対応できるようにしていけたらいいと思う。

〔事務局〕

・個別避難計画にはない詳細な部分については、個々に応じて対応していきたい。

〔会長〕

・個別避難計画を作成することは大変かもしれないが、大事な計画であり進めていかなければならない。

〔委員〕

・活動体系図についてはわかりやすくなった。目標、各ワーキングの活動、指標が明確にされた。

〔委員〕

・活動体系図については、今後どうしていけばよいかわかるものになった。災害支援については、在宅の利用者、家族からは、「私ら忘れられてないよね」と言われるので、この協議会の取り組みについて伝えたい。

〔会長〕

・個別避難計画が必要な方がいれば、市の方で実態を把握しているので、繋いでいただきたい。

〔委員〕

・急性期病院で、最後の最後に問題が挙がってくるということもあるのかもしれないが、ここ2年で身寄りのない方、家族と連絡が取れない方の入院が増えている。地域包括支援センター等、地域のいろいろな関係機関の協力は得られているが、入院後1からプロセスを踏むのが難しい。事前に何か対処できるシステムはないか。

〔事務局〕

・社会福祉課に福祉連携推進室があり、8050問題等の問題については相談を受け付けて、初めて把握するというのが現状である。声を上げない方をどうやってサポートするかというのは、民生委員等からの情報を参考にしながら、声を上げられない方を含め、地域の方全員に声をかけてい

ただいて、市に繋いでいただき対応するような形になる。民生委員には、毎月の定例会で周知をしている。

〔委員〕

・短期目標の回数などの数値目標については、指標ごとに目標値はあるのか。

〔事務局〕

・短期目標については、把握できるものを当てはめながら、経過をみていきたいと考えている。

〔委員〕

・県医務課で富山大学にデータ分析を依頼している事業があり、医療圏単位ではあるが、もう少し現状について把握できるようなデータを提供できればと考えている。

〔委員〕

・他市の取り組みなども知りたい。

〔会長〕

・この活動体系図を作成する中で、予防医療が大事であると感じた。本来は予防して、在宅療養に至らないのが理想であるが、在宅療養後は、些細なことでの急変を避けていければと思う。前回、肺炎の話があったが、転倒骨折、褥瘡、心不全等いろいろあるので、多職種のスキルや知識を高め、患者さんにもいろいろ知っていただき、今後進めていければと思う。そういう意味では、活動体系図を作ることにより、今後の目標も設定しやすいのではないかと思う。

〔アドバイザー〕

・この活動体系図により、住民がどうなってほしいのか、それに向けて専門職がどんな連携をとっていき、地域を作っていくのが明確になった。事業を何のためにするのか、自分がどこに位置付けられるのが明確になった。先生方に意見を出していただいたことが全体をまとめるきっかけになった。みんなが大局的に全体を見ることができるといふことの大切さと、具体的に何をしていくか、できるところからやっというスタンスで、他と比較できる指標からはじめるのではなく、比較できるデータがあれば使っていく、客観的な指標を作っていくというスタンスが明確になったと感じる。

(4) その他

〔委員〕

・活動体系図はわかりやすくなった。公的病院の立場からみると、高岡市民の皆さんがどういうことで困っているのか見えないことが多い。委員の皆さんは、患者さんのことがわかるので頭に入っていると思うが、自分は飲み込めないところがある。なぜなら具体例がないから。バーチャルでいいので、こういう病気があって入院、退院して、その後困っている例を挙げ、だからこのような話し合いをするという形であればわかりやすい。こういう話し合いをするのは、困った人がいるから、行政から手を差し伸べようという話が結局基本だと思う。現状は、急性期の疾患で入院され、治療をし、退院されて切れてしまう。退院後、外来でフォローすることもあるが、開業医に繋がることが多い。その後、患者さんがどう過ごしているのかわからない。一番困っている時に、困っていることに対しての治療をし、困らないようにして患者さんを送り出しているつもりなので、その後起こった問題についてはわからない。仮想的な事例で、困ったことについての話し合いをして、このようなサービスや支援が必要ということを紹介してもらえるとわかりやすい。

〔会長〕

・具体例があった方がわかりやすい。在宅医療研究会で、奇数月の第1火曜日に事例検討を行っているので参考にしてほしい。実際の事例についても検討しているので、少し参考になるかもしれない。

・「れんけいネット」で3病院のカルテを開業医が見られるようになる。総合病院の先生方は、開業医のカルテを閲覧することは、現時点でできないので、退院後のことはわかりにくいところもあるかもしれない。その点を少し改善しなければいけないと感じた。

〔委員〕

・法律用語の中で、事実行為、手続き行為がある。先ほどの例えば身寄りのない人が増えてきたという話においては、医療の部分や介護の部分で支援できるかといえば、人の生活上難しい。そういう時には法律的な手続きが必要となり、弁護士の支援などが必要である。連携の視点では、医療は、生物学的な支援と捉えている。先ほどの意見にあった、生活をどう支援しているのかという視点に立てば、このような手続き的な支援の連携が必要と感じる。

〔会長〕

・このような会議の場で、社会福祉協議会としてどのようなことをされているのかを積極的に発言していただければ、相談先もわかる。

〔委員〕

・生活困窮や例えば判断能力が低下している方、自分で食事がとれていないなどのケースについては、一緒に連携して支援できると考える。